

『エマユス運動とアベ・ピエール、

またそのシステムの有用性について』

～日本の現状に対する提言も含めて～

田中秀和

目次

はじめに

第一章

1. ヨーロッパの現状
2. エマユスが生まれるまで
 - a) アベ・ピエール
 - b) エマユス運動の原点

第二章

1. エマユスのシステム
2. エマユスが与えた行政的・メディア的影響
 - a) メディアをうまく利用したカリスマ、アベ・ピエール
 - b) エマユスの変遷
3. 国際エマユス

終章

1. 国際エマユスの今後
2. 日本エマユス
3. 結論にかえて（わが国の同問題への応用）

注

主用参考文献等

資料 1 : 1954 年のアベ・ピエールによるラジオ放送での呼びかけ全文訳

資料 2 : エマユス大阪 暁光会でのインタビュー書き起こし

Mémoire de Licence : "Le mouvement d'Emmaüs, L'Abbé Pierre et considérations sur l'efficacité du Système d'Emmaüs"

- Pour servir de référence au cas de la société japonaise à propos des problèmes de la
nouvelle pauvreté -

Introduction

Aujourd'hui, on de "la nouvelle pauvreté". Pourtant c'est un mot qui n'existe pas encore au Japon et en Europe on l'associe à des mots comme "la crise". De nombreux approches sont effectués dans chaque pays d'Europe par diverses organisations. Dans ce mémoire on observera les activités jumanitaires d'Emmaüs qui, parmi ces aspects uniques.

Première Partie

1. Actualité de la France et l'Europe

De nos jours, dans les pays relativement "développés", comme en France, l'un des plus grands problèmes sociaux est la hausse du taux de chômage. Les chiffres récemment annoncés montrent que cela est en voie d'amélioration, mais on peut observer toujours la même situation: il y a un fossé entre les pauvres et les riches. De plus, on remarque la presence des jeunes parmi les gens défavorisés.

Pour lutter contre la situation actuelle, le gouvernement n'est pas le seul à organiser des actions. Des entreprises privés et des associations à but non-lucratifs y participent également. L'Europe donne l'impression d'accorder de l'importance à cette solidarité. La solidarité était toujours un élément indispensable pour le développement des activités. Maintenant passons sur Emmaüs, l'une des associations les plus connus de l'Abbé Pierre, considéré comme un héros national.

2. Histoire d'Emmaüs

Emmaüs, qui est encore jeune mais pionniers dans le domaine humanitaire, fut fondé après la 2ème guerre mondiale par l'Abbé Pierre qui recueillait des SDF sur Neuilly-Plaisance à Paris. Peu à peu, les gens commencèrent à recycler des objets inutilisables et les vendaient. Le système d'Emmaüs est né à partir de là. Ce système a tout de suite permis à la première communauté Emmaüs de s'assumer financièrement. L'expansion des actions de l'association n'a pas demandé beaucoup de temps. Pourquoi?

3. Rôle d'un missionnaire, d'un parlementaire, et d'un résistant

Alors qu'il était membre du parlement, au moment de la création d'Emmaüs, l'Abbé Pierre a su particulièrement bien utiliser la force des médias. Pour commencer, il fit une annonce à la radio puis a fini par entrer dans le monde télévisé Il fut souvent l'invité

des chaînes nationales France3 et France2. On peut rapprocher cette utilisation des médias avec celle faite par les “Restos du Cœur”, créés à l’initiative de Coluche. Ces deux associations se sont stimulées mutuellement et ont finalement réussi à créer une sorte de “vague de solidarité” à travers la France.

Deuxième partie

1. Le système d’Emmaüs

Parmi des SDF qui se sont réunis au hasard, une personne a eu l’idée de faire du recyclage. C’est à partir de là que Emmaüs est né. Cette activité de recyclage a permis à l’Emmaüs des débuts de fonctionner en autonomie financière. Le mouvement s’est ensuite répandu sur l’ensemble de la France. Un des bons côtés de ce système était de permettre à des personnes pas particulièrement intéressées par les activités humanitaires de faire un geste significatif. Pour contribuer au système il suffisait en effet d’acheter des produits recyclés. Ce système proposait ainsi un moyen “naturel” et facile de participer à la solidarité, et eu ainsi un certain succès.

2. Emmaüs International

En 1969, Emmaüs International fut établi à Berne, capitale de Suisse, grâce à la participation de membres provenant du monde entier. En 1971, la 2^{ème} Conférence Internationale d’Emmaüs fut tenu et les statuts de l’association furent établis à cette occasion. Emmaüs était ainsi devenue une organisation avec une base solide, grâce à l’Union Européenne, les bénévoles, d’autres associations humanitaires et pu ainsi étendre le nombre de ses activités et ses possibilités.

3. Influence médiatique et politique exercée par Emmaüs

Le charisme de l’Abbé Pierre et l’efficacité du système d’Emmaüs ont eu une influence considérable sur la société française. Tout en espérant des actions de la part du gouvernement, Emmaüs et l’Abbé Pierre ont engagés des actions qui se sont propagées grâce au média à travers la population et jusqu’aux oreilles du gouvernement. Celui ci ne pouvait donc plus qu’agir et faire bouger les choses.

Dernier chapitre

1. L’après Emmaüs International

Reçu par le parlement européen, l’activité d’Emmaüs Internationale continuera de se développer tant que les injustices subsisteront dans le monde. De nouvelles initiatives sont déjà observable dans de nombreux pays.

2. Emmaüs Japon

Emmaüs, qui a s'installer dans la société en Europe, n'est pas encore bien développé au Japon. Une interview d'Emmaüs Japon a permis de mettre le doigt sur une différence de mentalité pour expliquer cela. Emmaüs ne pourrait-il pas fonctionner dans des pays à culture non catholique? Mais le système d'Emmaüs est universel et devrait ainsi pouvoir se développer de façon au Japon. En effet les activités dans les autres pays d'Asie sont dynamiques. Emmaüs Japon, basé à Osaka et membre d'Emmaüs International, a cependant er quelques succès même si l'association est un peu en retrait actuellement.

4. Propositions concrètes

Étudier les actions effectuées par les associations à but non lucratif en Europe peut constituer un apport non négligeable. Sur des problèmes similaires appliqués au cas du Japon, il est possible d'utiliser ce qui a été réalisé en tant qu'exemple et d'adapter les solutions à la société japonaise. Il est ainsi nécessaire d'approfondir le traitement de ces problèmes de société à un niveau universitaire.

レジュメ（和文、仏文）

はじめに

近年、「新しい貧困¹」と言われる現象が先進国を中心に露呈してきている。以下の章でも述べるが、わが国のこれに対する政策は、はっきり言って各先進国間では非常に遅れていると言わざるをえない。本論は、具体的には日本社会においても目立ち始めて久しい、また既に一時の社会現象として人々の意識の中で風化しつつある「ホームレス問題」に関連して延べられていくことになるが、ホームレスの概念は、わが国におけるそれと欧州におけるそれとは非常に異なっていることを最初に確認しておかねばならない。

日本で言うホームレスとは、「完全に路上において生活しているもの」すなわち野宿生活者を指すのに対し、欧州ではホームレスを、例えばフランスでは「決まった住居のない人々」SDF (Sans domicile fixe) といい、野宿生活者も含めた住宅危機に瀕している人々のことを総括して指す。この点に注意したい。

これによって、先にも述べたように、完全路上生活に陥ってしまわないための具体的な施策を検討し、また実行していく事が可能となっているのである。つまり、ホームレス予備軍に対してどのような方法をとればよいかといったことが、事前に状況を把握しておけば、具体的に考えやすい。

「貧困とは結果であり、その予防を考えたとき、プロセスが問題となる」と欧州委員会雇用社会問題総局の社会的排除担当理事である Jos Jonkers 氏も言っている。(福原、2002、「欧州における社会的排除との戦い」)

ともあれ、欧州ではこの「新しい貧困」という言葉に表される状況を明確に「危機」という言葉で捉え、さまざまなアプローチがすでに行われてきている。

また、欧州でのそういったアプローチのなかで、民間非営利組織が果たす役割は非常に大きいものとなっている。その理由については以下に述べるとおりであるが、本論ではその中でもユニークな側面をもつ人道支援団体のひとつ、「エマユス」をしょうかいするとともに、その活動が欧州、特にフランスにおける貧困に対する支援政策にいかに関与を与えたかということに主眼をおく。

第1章

1. ヨーロッパの現状（フランスを中心に）

現在、フランスを中心とする、ヨーロッパのいわゆる「先進国」で問題になっていることのひとつに、失業率の高さがある。状況は徐々に回復しているものの、依然として貧富の差が激しく、特に行き場を失った人たちのなかには、若者が多くみうけられることが指摘されている。各地でいろいろな政策が試みられているが、例えば欧州各国の中でも比較的問題への取り組みが早かったフランスの企業に対する闘いは、もちろん政府が主体となりつつも、一方で民間企業そして民間非営利団体などとの連携を重視している。その意味で“社会的連帯”が常に求められつつ、展開されてきた。

では、フランスではどのような取り組みが行われているのだろうか。体系的にみていく。

社会的排除と戦う政策は、フランスでは社会的参入 (insertion sociale)、統合 (cohésion)、社会連帯 (solidarité sociale) として語られる。フランスでは、すでに 1988 年の参入最低限所得手当 (RMI) がつくられた。これは、個々の受給者のニーズと能力にあった社会参入契約を国との間で結び、最低限所得保障とともに職業訓練や社会適応能力などのプログラムを一定期間実施して、社会参入を達成しようというものである。

また、住宅からの排除に関しては、適切な住宅にアクセスできない者に対して社会住宅の提供、家賃や住宅ローンに対する補助制度が用意されている。

このようななかで、1990 年に制定されたベッソン法は、こうした制度を積極的に活用することを確認するとともに、既存の制度では解決が困難な問題に対処するために住宅連帯基金を設置し、民間非営利組織を住宅困窮者支援実施組織として位置づけた。さらに、雇用適応能力の引き上げにあたっては、一連の職業訓練と国庫補助契約による就労支援などがあり、このほか民間非営利組織－社会参入支援企業－による社会適応能力の開発プログラムの実施が行われている。

こうした一連の政策の体系化が、1997 年に制定された「社会的排除と闘うための法律」である。ホームレスや貧困・社会的排除におかれている人々に対し、これまで展開されてきた多様な支援策に、しっかりとした位置づけを与えることを目指すとともに、排除されたものに対しても政治への参加の仕組みを整備し、娯楽や文化へのアクセス機会の保障も盛り込まれた。また、参入支援の民間非営利組織に対する支援策が盛り込まれた。

このように、国や行政による制度が定められる際に、常に念頭に置かれているのが、民間非営利組織の存在である。つまり、これらの組織無しではフランスの社会福祉の現場はうまく機能しないという現状がある。このことに深く関連しているのは、わが国とは少し違ったフランスにおける社会福祉分野での構造である。

特に 80 年代後半から現在に至るまで、フランスではこうした民間非営利組織（1901 年法によるアソシエーションも含む²）の活動がめざましい。ひとつには、市民による認知度の高さと、社会的連帯という観点から、これらの組織が多くを会員を集めているということ、そしてもうひとつには、社会のなかにおいてこれらの組織の存在意義が非常に高くなって

きているということである。

すなわち、主旨が認められれば、国や自治体からの援助が受けやすい状況ができあがっているのである。必然的に、こういった組織に携わる人々のモチベーションは驚くほど高く、非常に有効に機能している。法律が制定されたのは1901年と古い、ここ数十年が一番の活況を呈している。

ではいよいよ、これらの土壌が出来上がる以前から非常に有効に機能してきたアソシエーションのひとつであるエマユスの活動を詳しく見ていくことにする。

次に紹介するのは、今や英雄的存在であるアベ・ピエールが起こした運動である。

2.エマユスが生まれるまで

現在、フランスでは知らない人はいないと言っていいエマユス共同体だが、日本におけるその認知度は皆無に等しいので、その歴史的経緯を説明しておかねばならない。

第二次大戦直後、パリの街にはSDF (Sans Domicile Fixe) といわれる人たちがあふれていた。SDFとは直訳すれば「決まった住居がない者」であるが、これについての当時の主な理由は、まず第二次大戦による町の破壊であった。そしてそれまで数十年に渡って、「社会住宅」の建設が行われておらず、またそういう政策が採られていなかったということが大きい。

この状況に対する応急処置としては当時、身寄りのない人々には教会が彼らの住居となるスペースを提供したりしていたが、すべての教会でこれをやっていたわけではなかった。

そこでパリ郊外にあるNeuilly-Plaisanceに住居を構え、家なき人々の救援に尽力していた聖職者であるアベ・ピエール (Abbé Pierre) が起こした運動が「エマユス運動」といわれているものである。

偶然が偶然を呼び生まれたとされているこの恵まれない人々が集まり、自分たちで共同生活しながらリサイクル (廃品回収・修理・販売) を運営していくことにより自活を実現するというこの活動は、第一のエマユス共同体が「安定」したのを皮切りにフランス全土へと広がっていく。そして、それが「エマユス運動」として広がっていくまでに多くの時間は要さなかった。以下でその要因を考察する。

a)アベ・ピエール

聖職者、レジスタンス運動家、元フランス国民議会議員、廃品回収業、ホームレス救済運動家。肩書きを列挙すると、とても同一とは思えない人物。ひとことで言えば、それがアベ・ピエールである。「アベ (Abbé)」というのは、俗世間に出て活動する神父をあらわし、名前に冠してつけられる。

本名はアンリ・グルエス (Henri GROUES) といい、リヨンの非常に裕福な家庭の末っ子として生まれ、何不自由なく少年時代を送った。しかし、あるきっかけから、尊敬していた父の慈善活動などに影響を受け、19歳の時に聖職者を志し、カプチン修道会に入る。彼はこのとき、自分にあった一切の遺産を慈善団体などに寄付した。

その後グルノーブル大聖堂助任司祭などを経て、パリに出てくるまでに、2、3の呼び名を経由して、最終的にアベ・ピエール (L'abbé Pierre) と呼ばれるようになった。(日本での呼び名は、通称ピエール神父で通っているようだが、ここではあえてアベ・ピエールとする)

アベ・ピエールは 1939 年後半対独戦争のため、アルプス・アルザス地方に下士官として動員されるが、現地で肋膜炎にかかり送還される。その後、レジスタンス活動に身を投じ、ユダヤ人救済に尽力する。

レジスタンス活動では、ユダヤ人をスイスに逃がすために、教会施設を基点にしてユダヤ人たちをかくまったり、偽造パスポートの作成にも協力した。そして、自らも山を越え、ユダヤ人たちを国境近くまで送った。そこにアベ・ピエールが手配してあった親レジスタンス家族が住む山小屋から多くのユダヤ人が自由の国へと避難することができた。

戦後、この功績が認められて、国民議会議員に選ばれる (Meurthe-et-Moselle 選挙区。パリ郊外にある)。「世界連邦のための普遍的運動実行委員会」(Mouvement Universel pour une Confédération Mondiale) の会長を 4 年間務めるなど、7 年間議員生活を送る。

この議員生活中に、アベ・ピエールは自分の住んでいたパリ郊外のヌイイ・プレザンス (Neuilly-Plaisance) にヨーロッパ中から集まってくる学生たちのためのユースホステルを作る。そのユースホステルはエマユス (Emmaüs) と名づけられた。のちのエマユス運動の名はここからきている。アベ・ピエールは、キリストの使徒が始めて復活後のキリストと出会ったとされている町の名前を「希望」という意味に捉え、この名をつけた。

このエマユスの家には、学生のみならず、恵まれない人々、特に家族が住んだ。当然のことながら、アベ・ピエールの当時の議員手当だけでは増えていく居住者を養うことが次第にできなくなった。アベ・ピエールは、これを何とかするため、パリの街をひそかに物乞いしてまわったというエピソードも残っている。

b) エマユス運動の原点

アベ・ピエールは、1949 年のある日に、エマユスにとって運命的な出会いをする。そのエピソードについては、『遺言…苦しむ人々とともに』(アベ・ピエール著／田中千春訳)の訳者序文にうまく書かれているので、それを引用しておく。

「フランスではだれでも神父 (アベ)・ピエールを知っている。彼ほど万人に愛され、尊敬されている人は他に見当たらない。彼の創設したエマユス共同体も社会に深く浸透している。だれでも、古着や古道具を処分するときはエマユスを考える。

(中略)

その頃の混乱期に、自然発生的にエマユス共同体が生まれる。

この起こりは次のような感傷的な場面だった。1949 年のある日、自殺未遂事件があって、アベ・ピエールは呼ばれていった。そこには、過去に父親を殺し、20 年の服役を終えて監獄から出てきたばかりの男がいた。肉親も身寄りもなく、前科者の身に

もとより働き口はなかった。何を言って慰めても聞いていず、目は空を見詰め、もう一度自殺をはかることしか考えていないようだった。当時、アベ・ピエールは、世界の若者が集まるユースホステルにしようと、大きな廃屋を安く借りて自分の手で改修していた。そのために借金をかかえ、与えるものはなにもなかった。『何もあげれるものはないし…。どうしたものだろう…。死ぬ気でいたのなら、いっそ、わたしのところに来て手伝ってはくれないか？』

ジョルジュと名乗る男の目は輝いた。『え？このろくでなしのわたしが手伝うんですって？わたしにもできることがあるんですか？』

こうして彼はエマユス会員第一号となった。「あのとき求めていたのは生きる糧ではなく、生きる理由だった」と、彼はその後繰り返し言っていたそうである。

(中略)

しばらくして、近くのアパートから家財道具一切、乳母車までが歩道に投げ出された。貧しい家族が家賃滞納で追い出されたのだった。真冬だった。アベ・ピエールはその一家をしばらくミサ室に住ませた。いつまでもというわけにはいかなかったから、彼は借金をして小さな土地を買い、その家族とジョルジュとユースホステルの若者たちも手伝って、素人大工ながらなんとか家を建てた。そのうち、人々は困っている人に出会うと、アベ・ピエールのところへ行ってごらん、と言うようになった。4人、5人、10人と浮浪者が集まり、家なき家族が詰め掛けた。

(中略)

集まった浮浪者のなかに屑屋の経験者があった。彼の案内でゴミ捨て場を漁り、廃品回収業が始まった。驚いたことに、みんなが食べていけるだけの収入になった。自分のパンを自分で稼ぐ喜び！それどころか、次第にうまくなってくると、余ったお金でもっと貧しい人たちを助けることもできる！こうして屑屋家業は発展していき、今ではフランス全国あちこちの街角にエマユスと書いたトラックを見かける。どこの家でもエマユスの回ってくる日のために古着を洗濯し纏めておくのだ。」

このようにして始まったエマユスの活動であるが、引用文のなかにもあるように、この活動自体はまったく偶然のもとに生まれた産物である。それまで、アベ・ピエールによる恵まれない人々への救援活動は継続されていたが、彼が助けられる範囲は限られていた。そして、財源もそこをつこうかというときに生まれたこの活動形態によって、その後信じられないような大きな組織へと発展していく。以下の章で、エマユスのシステムについて具体的に説明するとともに、その創始者であるアベ・ピエールの役割について考察する。

第二章

1. エマユスのシステム

集まってきたホームレスたちの中に、たまたま廃品回収の経験者がいたことにより、始まったこの活動は、たちまち最初の共同体を自活させ、フランス全土に広まった。フランス全土に広がるまでには後述するアベ・ピエールによるメディアの巧みな利用・メディアティザシオン（*Médiatisation*）を待たなければならないが、すでにこの時点でエマユスのシステムの根幹はできあがっていた。すなわち、

1. 共同生活をしながら、毎日廃品を回収する。
2. 集めてきた廃品を仕分けする。力のあるものは主に回収業に、身体的に弱いものはこの仕分け作業に携わることで、誰もが仕事をすることができ、さらに、その内容はこれまた誰にでもできる手作業である。
3. 仕分けしたもののなかで、すぐにでも使えるものはコミュニティ（エマユスでは共同生活を営んでいる場所をこう呼ぶ）で使い、余ったものはコミュニティにブティック（店舗スペース）を設置し、そこにおいて一般の人々に中古の値段で売る。また、修理できるものは修理し、それもまた同様に売る。さらに、鉄くずや紙など、コミュニティでは処理できないものについては、直接業者に買い取ってもらう。

これが基本的なエマユスのシステムである。日本でも、ホームレスと呼ばれる人たちが携わっていることが多いこの廃品回収業であるが、日本では個人で行っているのが大半であるのに対して、ここで重要なのは、「コミュニティにおいて共同生活しながら、仕事を分担し協力し合っすすめ、コミュニティとしての自立を目指している点」である。

そして、もうひとつ、このシステムが優れていたのは、普段別にこれといって人道支援に関心がない市民でもかんたんに活動に参加できるという点である。すなわち、一番簡単なところでは、単にリサイクル品を買うだけですでに貢献できてしまう。コミュニティの活動に参加したわけでもないが、商品を買うという行為においてそこでお金を使い、結果的にはコミュニティに貢献しているのである。

また、このことは、地域にエマユスの名を浸透させることにもつながる。例えば、エマユスで売っている品物を買にくる人たちは、当然コミュニティで生活する人々との交流を持つ。それによって市民にとってエマユスの活動は理解しやすいものとなって地域に密着していったと考えられる。以上のことから、エマユス運動は、「関わり方」を自然な形で提供できたシステムに支えられていたという事がいえるであろうし、そのことによって社会とのリンクを完全に断ってしまわなかったという点において非常に評価できるのである。

2. エマユスが与えた、行政的・メディア的影響

エマユス発足当時、フランス国民議会議員（*député*）であったアベ・ピエールは、特にメディアの力をうまく利用した。ラジオでの訴えから始まり、最終的にはテレビに出演した。

これら一連のメディアティザシオンで人々の共感を得たもうひとつの大きなフランスの

事例にコリュージュ（Coluche）による「心のレストラン」運動（Les restos du cœur）がある。コリュージュはイタリア系移民 2 世のコメディアンで、彼の武器はまさにメディアであったということもあるが、著名な歌手を集めてチャリティコンサートをしたり寄付を募ったりして資金を集め、毎年冬の間（12 月から 3 月まで）ホームレスを中心とした恵まれない人々に暖かい食事を配っている。

この運動は今年で 20 年目を迎えた。コリュージュ自身は、この運動が始まった年に交通事故で亡くなってしまいが、その後は周りの人々が彼の意思をついで毎年ボランティアを募って活動を続けている。

ところで、この運動が始まった 1986 年にコリュージュはアベ・ピエールを訪れて、エマユスにとって非常に重要な寄付をしている。このように、両者は互いに刺激を与え合って組織を成長させ、フランス社会にいわゆる、「連帯感の嵐」を巻き起こした。

心のレストランには学生のボランティアが多く、若年層に大きな影響を与えている。コリュージュと心のレストランについては、別の機会に詳しく述べることにしたい。

さて、アベ・ピエールのカリスマ性と、そのシステムの秀逸さでもって、エマユスはフランス社会に大きな影響を与えたといえるのではないだろうか。行政を待っている間に市民に先に問いかけ、メディアもそれを大々的に取り上げたため、国が動くという図式をもたらしたのであった。

a)メディアをうまく利用したカリスマ、アベ・ピエール

アベ・ピエールの果たした役割のなかで非常に大きく評価されるのが、その広告塔としての役割である。アベ・ピエールは自著でも語っているとおり、時としてメディアの力を借りることを拒まなかった。

メディアに出て行くことは、同時に危険も伴い、聖職者としての本業もあるかたわら、当初は非常に悩んでいたことが想像できる。例えば、1954 年の冬にフランス社会連帯における歴史的なラジオでのカンパ呼び掛けで読まれた、『友よ、助けたまえ！（Mes amis, au secours）』という一文で始まる（資料 1）、エマユス運動の歴史においてあまりにも有名な文章がアベ・ピエール自身によって書かれるまでには、周囲の人々の後押しが必要であった（Violet, 2004, L'abbé Pierre, p.214）。

しかしながら、無許可で住宅施設を立てていたころ、役人がやってきて注意を促したときに、アベ・ピエールは次のようにもいっている。

「もしもまだ免状がないと建てることができないというのであれば、わたしは明日にでも新聞社を呼んで、「これは『生きるための免状』である」と大々的にアピールしましょう。（中略）そして裁判所まで行きましょう。ただし、司祭の服をまとい、議員のバッジをつけてね。そこでとことんまで主張しつづけてみましょう。」

（Abbé Pierre, 2002, Je voulais être marin, missionnaire ou brigand p.101）

また、これに関連して、無念にも臨時住居に入れるはずだった子どもが寒さで死んでしまったときに建設大臣にあてて書いた手紙はフィガロ紙 (Le Figaro) で紹介され、このことは建設大臣を直接アベ・ピエールのもとに出向させることとなった。

このようにして、積極的にメディアと関わることによって、ラジオ放送で連帯カンパを呼びかける以前からも少しずつではあるが情報の浸透に勤めており、1954年に爆発したといわれている「連帯感の嵐」も実は起こるべくして起こったことなのだということがわかる。また、彼の周りには、当時から活動に興味を持って訪ねてくるジャーナリストや政界の知人なども多かったこともこれに関連していることはいままでのない。

次に引用するのは、アベ・ピエールが1954年に行った歴史的なラジオでの連帯カンパの呼びかけのあとの反響の様子である。

「アベ・ピエールの名が全国に広まったのは、1954年の厳冬の人情物語がきっかけだった。アパートを追い出された老女や赤児の凍死の報告に接して、アベ・ピエールはラジオで悲壮な連帯カンパの呼び掛けを行った。その日のうちに毛布5,000枚、テント300張、ストーブ200個が集まった。当時モスクワにおいて平和賞を受賞していたC・チャップリンの200万フランをはじめ、寄付金が各地から次々と舞い込んだ。」

〔アベ・ピエール, 1994, 『遺言…苦しむ人々とともに』(田中千春訳)〕

また、同書に、

「(中略) 昼過ぎ、パリはサンジェルマン・デ・プレの瀟洒な建物を、アベ・ピエールに護られたホームレス数百人が急襲・占拠した。不動産会社所有のこの建物は約一万平方メートルあり、三年前から空いたままになっていた。午後には、バラデュール首相が急遽官邸に出てきてアベ・ピエールを迎えた。政治家は五ヵ月後に大統領選を控えて失策は許されないのだ。こうして、この百数十人には退去命令が出されないこと、さらに他の不当に空いているアパートが接収され、ホームレスに割り当てられる事が約束された。このニュースは、ホームレスが目立ち始めている日本でも早速報道された。」

とあることからわかるように、アベ・ピエールはメディアを味方につけ、政治をよく理解し、機を見て非常に効果的に行動に出ていたことがわかる。何よりも、民衆の声が常に彼に同調するかたちで連帯感を行政に見せつけることに成功している。ちなみに、このニュースが一面を飾った1993年9月26日付のLe Parisien紙には、このあとアベ・ピエールが立ち去るときに、その場にいた群衆が拍手で彼を見送った、とある。

b)エマユスの変遷

ここで、エマユスがどのように生まれ、市民に定着し、そのニーズに応じてきたのかを時代段階別に整理してみたので、それを見ていくことにする。

第1段階：1947-1953 まず、エマユスの活動が一番求められていた時期にあたる。ここでエマユスは生まれ、まさに世の中のニーズに合った活動として受け入れられた。その様子についてはすでに述べた。

第2段階：1954-1962 システムの有効性というよりも、ここではまだアベ・ピエールとその周りの人々の存在そのものが絶大な牽引力となっていた。1954年のラジオでの呼びかけ後に集まった寄付金を元に、新たにさまざまな活動が生まれ、エマユスのもとにさらなる組織、建設会社までが作られる。また各地に支部も増えた。そこで問題になったのが、組織の整理の問題である。パリにある本部だけではどうしても組織を管理しきれなくなってきたのだ。

また、1958年にアベ・ピエールが病気になり、それまでついていたエマユスの会長の地位を退くと、今度は彼に変わってイニシアチブをとり始めた一部の人々によるパリ本部の「高級化(vaticanisation)」が問題視されるようになってきた。こうしたなかで、グループ全体の調整が急務となり、エマユスは初めてここで組織化に着手することになった。強烈なカリスマを一時的に失った組織は、皮肉にもそれを機にさらなる発展に向けて動き出すこととなった。また、アベ・ピエール自身は、このころから世界中を視察する旅にでる。各地でエマユス運動を広めると同時に、要人とも多数会って、和平に向けた歩み寄りの精神を説いた。各地にできたエマユスは後の国際エマユス(1969年)へと発展していく。

第3段階：1963-1982 この期間は、エマユスの活動が一時勢いをなくしている。理由には経済成長が著しい時期であることが挙げられよう。戦後の復興が進んでくると、あふれかえていた貧困者にも雇用機会が回ってくるために、目に見える貧困者の数は減っていく。しかしながら、次にくる第4段階で見られるような状況が発生する要因もまた同時にこの時期に作られていった。すなわち、合理化による雇用形態の変化(一時・臨時雇いの増加)である。

第4段階：1983-2004 1982年から再びエマユスが携わらなければならない問題が増え続け、その発展をみてとることができる。「新しい貧困」とい

う言葉に代表される、貧困者たち、それも高度経済成長の波がもたらした歪みによって生み出された貧困が露呈してくる時期である。この時期に、フランス各地では上述のアソシアシオン（民間非営利組織）が多く作られることになる。このことから、エマユスは、1949年の創立以来、いわば貧困問題の草分け的存在であるということが可能であろう。

1981年に再びアベ・ピエールはメディアの世界に帰ってくる。このころは主に、テレビ出演が目立っている（1981年のクリスマスにはTF1（フランスの1チャンネル）に出演している。これも、今やしっかりと地方分散で運営されているエマユス運動そのものが地域に根強く浸透していき、また国際エマユスを通してさまざまな国へとその輪を広げていくようにとの彼の願いであろう。

アベ・ピエールは2004年にはグラン・クロワ・ド・レジオン・ドヌール（Grand-croix de la légion d'honneur）³を受けている。

以上みてきたように、アベ・ピエールが起こしたエマユス運動は、見事に社会に認知され、既成概念や法律を改革するきっかけを作り、今日に至る市民アソシアシオンの活躍に代表される、社会における連帯を重視した政治が実現される基板を築いたといえるだろう。

次に紹介するのは、上述したアベ・ピエールの世界訪問がもたらした、国際エマユスのフランスの枠を越えた広がりである。

3.国際エマユス

1969年エマユスグループの代表者によって、スイスの首都ベルンで国際エマユスが設立された。1971年には第二回国際エマユス会議がカナダで開かれ、この席で国際エマユス協会の定款が制定された。これにより、エマユスは組織としての確固たる地位を得、欧州連合からの援助をはじめ、さまざまな支援活動を行うことが可能となった（ボランティア・他の人道支援団体などへの支援も含む）。

また、国際エマユスは、「共に、行動し、そして不正を告発しよう」〔Ensemble, agir, dénoncer〕をスローガンとして、国際エマユス会議を設け、各国代表が一同に会して活動報告や話し合いを持つ機会としている。2003年にはルワンダで一週間にわたり盛大に行われた。そこでは、ルワンダで現在行われているプログラムへの参加をはじめ、次の国際エマユス会議までに達成すべき、非常に多岐に渡る目標について話し合われた。これら詳細については、別に機会に詳述する事にしたい。

以下に示すのは、国際エマユスの活動目標・構成と、国際エマユスグループに加盟するエマユスがある国のリストである。

基本理念

いかなる差別もせず、それが誰であろうと、一番苦しんでいる人にまず手を差し伸べること。

共通目標

貧困の理由に立ち向かいながら、貧しい人と共に、また貧しい人たちのために活動する。

さまざまな活動

回収作業とリサイクル、農業（果樹園、養豚場などさまざま）、識字教育、人権擁護、育成（職業訓練に代表される）、住宅問題、環境保護、健康 etc。

4大陸に広がるエマユス

35 カ国による 309 の登録アソシエーション（パートナーアソシエーションも含めると、47 カ国 442 のアソシエーション）日本語では共同体とも訳す。

地方に分散した組織

- 8 地域（アフリカ、北アメリカ、南アメリカ、アジア-極東、南アジア、東南アジア、中央南ヨーロッパ、北ヨーロッパ、フランス）
- 2 地区（東ヨーロッパ、レバノン）

- 理事会（Conseil d'administration d'Emmaüs International, 23 人の代表者とアベ・ピエールによって構成される。ただし、エマユスの会長はレンゾ・フィオール Renzo FIOR）
- 実行委員会（Comité exécutif, 7 名の代表者とアベ・ピエールによって構成される）
- 国際事務局（Serétariat International, 15 名により構成される。フランス Alfortville, 代表者 Alain Fontaine）

世界のエマユスグループ

- ヨーロッパ… フランス、スイス、ドイツ、ベルギー、スペイン、オランダ、スウェーデン、イタリア、デンマーク、ノルウェー、フィンランド、オーストラリア、ポルトガル、イギリス、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、ポーランド
- アフリカ… ルワンダ、南アフリカ、ベナン、ブルキナ・ファソ、ブルンジ、カメルーン、コートジボワール、コンゴ
- 南北アメリカ… カナダ、アメリカ合衆国、ペルー、チリ、アルゼンチン、ウルグアイ、ブラジル、ボリビア、コロンビア、グアテマラ
- アジア… レバノン、インド、バングラディッシュ、日本、韓国、スリランカ、フィリピン、インドネシア

終章

1.国際エマユスの今後

2004年10月20日、ヨーロッパ議会で招待された「国際エマユス」は、世界に不公平が無くならない限り、今後も大きく発展していく運動である。ブリュッセルにおけるこのヨーロッパ議会には、30の国から50人の代表者が参加した。議会では、92歳になるアベ・ピエールと国際エマユスの会長のレンゾ・フィオールがヨーロッパ議会への彼らの要求を繰り返した。すなわち、

- ①「イスラエル・パレスチナ間の紛争における政治的国際規約」における進展の再開について
- ②国連の改革、その正当性、民主的機能、それらをより強化することについて
- ③人身の不法取引に対する例外的動員、そしてそれを可能にする新たな政策、被害者にとって有利な法律の制定などについて

である。

また、アフリカ、南アメリカ、アジアからの代表者からも同じように声明が出された。彼らは、ヨーロッパ議会が率先して、南側諸国における自然資源の度を越した私有化や開発や不平等な経済バリアの消滅化に対する自らの立場を明確にしていくべきであること、アフリカにおける、国民に自由な決断を許さないヨーロッパ諸国の政策の改革が必要であると訴えた。またそれが紛争の種となっていることも訴えた。

この機会を利用して、ヨーロッパ議長であるJ・ボレル・フォンテリエス (Josep Borrell Fontelles) と、アベ・ピエール、レンゾ・フィオールが対談した。そこでは、ヨーロッパでもなおも憂慮すべき事態に直面している住宅問題について話し合われた。

さらに、「貧困と闘う国際学校 (Ecole mondiale contre la misère)」と称してヨーロッパ議会で提案されたものの内容が非常に興味深い。これは、世界中にあるエマユス共同体がすべてのヨーロッパ議会議員を各共同体に招待するというもので、議長のJ・ボレル・フォンテリエス氏も近々ブリュッセルにある共同体に訪れることになっている。氏によれば、「このような試みは、各議員が取り組んでいる社会的排除の問題に関する考察に大きな助けとなる」ということだ。

また、上述した「新しい貧困」という概念を研究するための取り組みを行っている。これについては、エマユス以外のアソシアシオンでも日々考察されており、欧州では大学に加えてアソシアシオン中心に非常に盛んに取り組まれている。

2.日本エマユス

ヨーロッパで市民の生活に根をおろすことができたエマユスも、日本ではまだまだ浸透とまではいかないようだ。

この成功は、フランス人が伝統的にかとりっくだからであるといえるかもしれないが、韓国をはじめ、アジア諸国にも広がった要因としてあげられるのは、そのロマンチズムにあふれた夢のある活動形態、著書の中に現存のカトリック教会における制度への批判が多く見られることから明らかであるようにアベ・ピエール自身、教義にとらわれない神父であるという事だ。

とはいえ、朝日新聞が1993年11月22日、訪日したアベ・ピエールのインタビュー記事を載せるなど、一部で報道されているものの、フランスでは知らぬ者のないアベ・ピエールも、彼の始めた「エマユス運動」も、日本ではまだ馴染みが浅い。

日本エマユスで行ったインタビューでは、メンタリティの違いが指摘された。やはりノンカトリックの国では流行らないのだろうか。しかし、これまで述べてきたように、システムはきわめて普遍的で誰にでもでき、どこの国でも存在しえる活動であり、日本でも機能は同じであることがわかった。若干の違いはあろうが、廃品回収→修理→販売というサイクルは同じである。他のアジア諸国でも、活動は盛んであるだけに、日本でもエマユス運動が浸透する可能性はあるはずである。

ここで、大阪を中心とした活動がこれまでに残してきた実績をざっと説明しておこう。

日本におけるエマユスの始まりは、1956年、神戸の生田川のほとりでロベール・バラード神父が貧困者とともに生活をはじめたことによる。バラード神父は、その付近に土地を購入して、暁光会（ぎょうこうかい）と名づけ、廃品回収によるエマユス運動をはじめたが、地域整備のため撤去されたしまったので、大阪市西成区津守に800坪の土地を購入して、新たにスタートを切ることになった。

これを暁光会大阪支部と名づけ、廃品回収業を営みながら1960年には大阪エマユス暁光会の敷地内に保育園（ひかり学園）ができ、現在も運営されている。

また、大阪の西北、箕面の丘に6000坪の土地を購入し、ここでは果樹園、養豚、養鶏などで自活を行い、施設の老人ホームを建てた。これらを実現するための資金源は、エマユス活動で得た収益とパリ外国修道女会やヌベール愛徳修道女会からの援助であった。やがて、1966年には箕面支部に医療法人北原病院（老人病専門）ができ、1970年にはあかつき特別養護老人ホームが完成した。エマユス暁光会は現在社会福祉法人であり、箕面支部では主にデイサービスセンターを設けて老人ホームとしての役割を果たしている。

一方の大阪支部では、通常のエマユス活動に加えて、発足当初から20年ほど前までは「ヤングエマユス」という組織が存在していた。これは、ボランティアとしてきていた学生たちが夏休みを利用して、自分たちでワークキャンプを始めたもので、日本各地で行われていた。フランス、ルアーブルで1963年に始まっていた学生によるワークキャンプに日本からは1972年に初めて参加し、この影響をうけて、日本でも毎年行われていた。キャンプの

内容は、主に廃品回収や撤去作業などの手伝いで、その収益はひと夏で 150 万円にも達した。

この運動は、最初に韓国のエマユスに伝わり、韓国では今でも行われている。もちろん、フランスでも毎年夏、各国からの参加者を募って、各地で行われている。

ちなみに、日本からの参加は、国際力 .com のホームページ (http://www.kokusairyoku.com/vol_season_top.html) 内で受け付けている。18 歳以上で、コミュニティの規則を守れる人であれば、誰でも参加が可能で、参加費は無料である（ただし、航空券、小遣いは実費）。

ヤングエマユスは、残念ながら、現在では消滅してしまっているが、インタビューによると、その大きな理由は時代の変化だという。つまり、物質的に豊かになったきたため、ボランティアをやる学生が少なくなったというのだ。確かに、昨今の学生達はアルバイトやセカンドリースクールに時間をとられ、以前のようにボランティアに行く機会が少ないのかもしれない。しかも、エマユスの活動は現在の日本ではほとんど知られていない状況に加え、暁光会のほうでも宣伝活動をこれと行って行っていないようだった。以前であれば、学生たちはクチコミでエマユスを見つけてやってきたという。もちろん、宣伝活動をやれば今でも学生が集まると思われるが、現時点では学生たちを迎え入れ、活動の場を与えるための体制が整っていない状況であろう。

大阪における失業率が 8%を越えるいま、市民の新たな運動の一端としてエマユス活動が見直されるときが来ると筆者は信じたい。

2005 年現在、大阪エマユス暁光会、神戸エマユス暁光会、東京エマユスの家とともに国際エマユスの一員である。今後の動向に注目していきたい。

3.結論にかえて（わが国の同問題への応用）

以上、エマユス運動を中心に、欧州における貧困と闘う非営利組織の紹介と、特にエマユスのシステムについて述べてきた。ここで、現在の日本においてこれらの組織に学んでいくべきことを想定して、日本の現状に触れながら比較・考察して結論としたい。

わが国では、社会的援護を要する人々の問題（ホームレス、貧困者、アルコール依存者、外国人への排除や摩擦、家庭内暴力・虐待、高齢者の自殺や孤独死など）が広がりつつある。しかし、日本政府はいつこうにこうした問題に目を向けようとしてこなかった。

たとえば、2001 年 8 月の国連社会権規約委員会による日本政府の社会権への取り組みに対する審査報告では、総括所見のなかで日本政府のホームレス問題への取り組みに「懸念」が表明され、「提案および勧告」が行われた。そこでも日本政府の無策ぶりが明らかとなった。

とはいえ、ようやく厚生労働省が 2000 年初めに「社会的援護を必要とする人々の社会福祉のあり方に関する検討会」を設置し、2000 年 12 月に同検討会『報告書』を発表した。この報告書では、これらの問題を「社会的排除」として取り上げた。現在その実態把握や

具体的施策の構築・実施が行われている最中である。しかしこれらの結果がでて、具体的に政策が進むまでにはまだかなりの時間を必要としそうである。

また、上述したが、フランスを始め欧州の社会福祉政策では、一貫して市民の「連帯」の重要性を求める。これに対し、貧困や社会的排除を個人の責任とみなす風潮が依然として強い日本社会では、政府はもちろん社会においても社会的排除と戦う取り組みや意識は十分に育っているとはいえない。

まずは、欧州のこうした取り組みを検討しつつ、日本の現実を見直していくべきである。それにはもちろん日本の風土に合った日本独自のやり方を模索していかなければならないが、ヨーロッパにおけるこうした非営利組織の活動に学ぶところは非常に大きい。日本が抱えている同種の問題において、参考にできることをうまく採用し、これらの現状についての研究を大学レベルでさらに進めていく必要性は否めないと考える。

また、本論では深く触れられなかったが、これらの欧州における非営利組織を個別に調査・分析することが、さらに日本の事例と比較する際に有用であると思われる。これらの点を今後の課題としたい。

注：

- 1、具体的には、80年代以降に社会構造の変化によって新たに出てきた住宅問題などを総括して指すようである。フランス語では *Nouvelle Pauvreté*。
- 2、フランスにおけるアソシアシオン (*association*) とは、1901年7月に制定された法律によって認められている非営利組織のこと。この法律の内容は、2人以上同じ志を持つものが集まり、非営利であれば、結社を組織することができるというものである。多くの民間非営利組織はこの法律によって組織を立ち上げており、その活動内容は多岐に渡る。
- 3、レジオンドヌール勲章 (*Légion d'honneur*) は、ナポレオン1世によって制定されたフランスの勲章で、グラン・クロワ、グランオフィシエ、コマンドール、オフィシエ、シュバリエの五階級ある。したがって、アベ・ピエールがうけたグラン・クロワは最高位のものである。

主要参考文献

Violet, Bernard (2004): *L'Abbé Pierre*, Fayard.

Abbé Pierre (1997): *Mémoire d'un croyant*, Fayard.

Abbé Pierre (2002): *Je voulais être marin, missionnaire ou brigand*
– *Carnets intimes inédits* –, Le cherche midi.

Abbé Pierre et Père Pedro, propos recueillis par Anne et Daniel Facérias (2002):

Pour un monde de justice et de paix, Presses de la Renaissance.

コリン・コバヤシ編 (2003) : 『市民のアソシエーション フランス NPO 法 100年』

太田出版

飛幅祐規(1991): 『ふだん着のパリ案内』 晶文社

- 福原宏幸(2002): 「欧州における社会排除との闘いーその動向と課題」
『部落解放研究』 145,pp.31-41.
- 福原宏幸(2002): 「EU におけるホームレス支援政策と Social Exclusion」
『経済学雑誌』 102,第 3,4 号,pp.3-11.
- 福原宏幸(2002): 「現代フランスの雇用・失業をめぐる基礎データ」
『経済学雑誌』 105,別冊,pp.49-54.
- アベ・ピエール(1995): 『遺言・・・苦しむ人々とともに』 田中千春訳、人文書院

主要参考ウェブサイト

Emmaüs International : [Online Available: 2005/1/16]

<http://www.emmaus-international.org/fr/index.php>

資料 1 1954 年のアベ・ピエールによるラジオ放送での呼びかけ全文訳

後に、アベ・ピエールは、このラジオ放送を持って、L'insurrection de bonté（善の蜂起）の始まりであるとしている。

友よ、助けてくれ！ひとりの女性がセバストポール通りの歩道の上で、今夜 3 時亡くなった。彼女はその手に、アパートからの退去を命じる文面の文書を握り締めていた。毎晩寒さで縮こまりながら、屋根もなく、パンもなく、ろくに着るものもない人々が 2 千人以上いる。このような状態のなかで、緊急集合住宅はもはや緊急どころか絶対条件だ。

聞いてくれ！3 時間のうちにふたつの最初の「救援センター」ができあがる。ひとつはパンテオンの下手、モンターニュ・サント・ジュヌヴィエーヴ通りのテントに、もうひとつはクルブヴォアに。既にそれらは人で溢れかえっている。ゆえに、あちこちにセンターを作らなければならない。

今晚にでもフランスのすべての町で、パリのすべての地域で、真夜中でも明かりが灯っている扉が見つけれなければならない。そこには毛布があり、藁が積んであり、そして暖かいスープがある。扉に掛けてある札には「友愛救援センター」と書かれており、その下には、「苦しめる君よ、汝が何人であろうとも、入って眠り、食べて、そして希望を取り戻しなさい。ここでは君は愛されているのだ！」と書かれている。

この 1 ヶ月間は非常に厳しい寒さになるという予報が出ている。冬が続く限り、これらの救出センターは必要なのだ！私たちの兄弟が貧困の不幸によって死んでいくのを目の当たりにするなかで、私たちが考えられる事はひとつしかないはずだ。すなわち、この事態を続かせないようにする意思だ。

お願いだ！一刻も早くそのために行動を起こそうではないか。多くの苦しみが私たちに気付かせてくれるもの、それは「フランス全土が共有する魂」だ。

みんなのひとりひとりが家なき人々を助けることができるのだ。遅くとも明日までに 5000 の毛布と 300 の大きなアメリカ式テント、それから 200 のストーブが必要だ。それらをできるだけ早く、ラ・ボエシー通り 92 番地にあるホテル・ロシェステに持ってきて欲しい。そして今晚 23 時、それらを運ぶためのボランティアとトラックが、モンターニュ・サント・ジュヌヴィエーヴ通りにあるテントの前で待っている。

みんなのおかげで、今晚ひとりの人も、ひとりの子供も、アスファルトの上やパリの河岸で眠ることはないだろう。ありがとう！

原文

Mes amis, au secours! Une femme vient de mourir gelée, cette nuit à trois heures, sur le trottoir du boulevard Sébastopol, serrant sur elle le papier par lequel on l'avait expulsée.

Chaque nuit, ils sont plus de deux mille, recroquevillés sous le gel, sans toit, sans pain, plus d'un Presque nu.

Devant tant d'horreur, les cités d'urgence, ce n'est même plus assez urgent.

Écoutez-moi! En trois heures, deux premiers centres de dépannage viennent de se créer; l'un sous la tente, au pied du Panthéon, rue de la Montagne-Sainte-Genève, l'autre à Coubevoie. Ils regorgent déjà. Il faut en ouvrir partout.

Il faut que ce soir même, dans toutes les villes de France, dans chaque quartier de Paris, des pancartes s'accrochent sous une lumière, dans la nuit, à la porte de lieux où il y ait couvertures, paille, soupe et où l'on lise sous le titre <<Centre fraternel de dépannage>>, ces simples mots: <<Toi qui souffres, quel que tu sois, entre, dors, mange, reprends espoir, ici, on t'aime!>>

La météo annonce un mois de gelée terrible. Tant que dure l'hiver, que ces centres subsistent! Devant leurs frères mourant de misère, une seule opinion doit exister entre les hommes: la volonté de rendre impossible que cela dure.

Je vous en prie! Aimons-nous assez tout de suite pour faire cela.

Que tant de douleur nous ait rendu cette chose merveilleuse: l'âme commune de la France. Chacun de nous peut venir en aide aux <<sans-abri>>, il nous faut au plus tard pour demain: 5000 couvertures, 300 grandes tentes américaines, 200 poêles catalytiques.

Déposez-les vite à l'hôtel Rochester, 92, rue de la Boétie. Rendez-vous des volontaires et des camions pour le ramassage ce soir à 23 heures, devant la tente de la Montagne-Sainte-Genève.

Grâce à vous, aucun homme, aucun gosse ne couchera ce soir sur l'asphalte ou sur les quais de Paris. Merci!

資料2 エマユス大阪 暁光会でのインタビュー書き起こし

コメント：エマユス大阪責任者 谷 安郎

インタビュアー：田中 秀和

ーここにいろいろとフランスから持ってきたエマユスの資料があるのですが…。

谷：アベ・ピエールも年いったなあ。92か。うちのバラードよりふたつ上やから。

ー今も神戸にいらっしゃるんですか？

谷：神戸にいます。

ーお元気でいらっしゃいます？

谷：うん、やっぱり年やから弱ってきてるわね。頑固もんやから。子どもみたいに頑固なところあんねん。4、5年前に喧嘩して来んようになってん。毎月来ててんけどね、ここに。

(中略)

ー日本のエマユス活動について 日本における普及率についてお聞かせください。

谷：はい、知ってる範囲なら。なんかね、一時期ねえ、話は飛ぶけどねえ、僕らが行く前に村田神父とかが中心になって、フランスのキャンプへ行かないかってよびかけをしたわけよ。あのとき何人くらいだったかな。やっぱり2、30人集まって、でも慈悲で行かなあかんからね。あの時分割合高かったからね飛行機が。20万円くらいいったと思う。でむこうで、アベ・ピエールのメッセージもろたりなんかしてね。最後に帰ってくるときに、日本でも自分たちで作ろうやないかと、で、ここを拠点にしてヤングエマウスっていうのを作ったわけ。

もう10年以上なるかな、だんだん学生たちが集まらんようになってきて。豊かになってきたでしょ。廃品回収なんかやるのが出て来なくなって、で、結局ヤングエマウスは消滅したような形。活動はもうないけど、有名無実みたいなもんやね。

ヤングエマウスから入ってきた子が何人かおったけどね、今でも年末にお歳暮贈ってくれる人が何人かおる。もう20年以上前の連中やね、あの時代に20代やった連中、今働き盛りやね。

ひとりね、単独で自分ひとりでエマウスにでかけて帰りにインドにいつて帰って来よった。でね、東京にエマウスがあるんですわ。エマウスの家。そこで一緒に働いておってね、そのときに村田神父にね、家がお寺のお坊さんやねん、親父から後継げいわれてるわけ。迷いにまよってね、インドからここへ一番に帰ってきて、たにさんどないしょ、っていうからね、そらあおまえ、親の仕事やっぱり継がなあかんのちゃうかいうてね、でいま継いどる。奥さんがね、同じヤングエマウス出身で、で今子どもも大学生になって横浜大学いつてるみたい。

本人は紀伊勝浦。ヤング同士で結婚したのは何組かあるわ。一人はねえ、ここで働いて、最終的に隣の保育園にいった女の子、その子と一緒にここを出て行って。

ぼくが45,6の時やったからね、ヤングはじまったのは。一時期はうちで寝泊りしと

ったやつ何人かおる。

ーみんなボランティアで？

谷： みんなボランティア。で、ひとりね、こらあもう、フランスへ行ってないんやけどね、たまたまうちを知って、うちで働かしてくれいうてね、それはどこやな、あの東京の大学いってて、自分の食べしろはね、パチンコが得意で、パチンコで稼いで生活費にあてとった。

ーエマウスの活動は普段で、あとはパチンコですか？

谷： ヤングエマウスの活動で、毎日はないからね。うちの仕事手伝うこともしてくれてたし。その彼が、4年ほど学校いかなかったら除籍されるってんで、そろそろ大学かえろかなってんで教授に相談して復学しよった。

卒業してから国語の先制して、学校は転々と変わりよったけど。いろいろなやつがおったわ。

ー学生しながら来ていたひとも多いんですか？

谷： それはもちろん、そういうのも多いよ。

ーほとんどが大学生ですか？

谷： はじめは社会人もおったけどね。第一回キャンプのときね。キャンプもね、何回くらい行きおったかな、3、4…。ぼくもキャンプやとったからね。

ーそれは日本ですか？

谷： キャンプは方々、はじめ第一回はね、東京の修道院でね、解体の作業があって、でそれを解体して、あの時分で100万かなんかもらった。ヤングがね。そのあと誰もやったことないでしょ、ぼくが責任者みたいな形で参加して、あもう、東京の責任者で大学の先生の菅さんが大学行きながら、東京のコミュニティーの責任者やってて、その人とふたりでね、鉄やとか紙やとか探し回ったわけや。だいたい売るところがあったからね、その時分でだいたい150万かそこら、廃品回収で。あの時分は値がよかったからね、今と違って。

それから第二回は、エマウスの家を拠点にね、その周辺で回収して。第三回は京都で。キャンプを三つつくった。

ー大体何人くらいいたんですか？

谷： 京都ではね、各キャンプで、20人以上集まったね。

ーほぼ学生ですか？

谷： その時分はほとんど学生。

ー大学にいかない人もたくさんいましたか？

谷： いや、それはなかったと思う。

ー彼は（パチンコの）ここに住んでいた？

谷： 住んでいた。

ー彼がここにいる間は、他のメンバーと同じように、生活は保障されていたのですか？

谷： 食べることはね。他のことは自分で稼がないとしゃあない。3年ほどおったね。で、最後4年目になったら学校いけんようになるから。教授と相談して帰りますいうてか

えりよった。

で、無事卒業して、転々としとったわ。国語教師。

—どうやって当時の学生たちはエマウスを知ったんでしょう？

谷： 彼の場合は、その教授からこういうところあるぞって聞いたと思うわ。

—そのころは学生が行く先があったんですね。

谷： その時分はね、やっぱり学生間で、おれこういうところ行ってんねやぞっていう話がでて、それが口づたいで、聞いてくるようなケースが多かったね。

—もう事実上ヤングエマウスはないですが、最後の年はいつですか？

谷： もう 20 年前やね。ちょうど経済的に豊かになってきたときね。

—リサイクル品の値段がどれくらいさがりました？

谷： ぼくがこの仕事はじめて 40 年になるけど、その間にね、ぼくも神戸でバタヤ¹やっあって、新聞が 6 円か 7 円、一キロ。今でも新聞は 5 円 50 銭やからね。あの時分は店屋でも普通の家でも貯めて出しとったもんね。今はほとんど貯める人いなくなった。

それをね、釜²におったバタヤさんがね、収容されるのが嫌で、公園なんかにテントはってる。そういう人たちが、値段安いからね、ふつうに仕切り³もっていったら、3 円かそういうので買ってくれる。

ぼく⁴とこ 7 円でね買ってる。彼らを援助するために。今でもやってるけど、もう何年になるかな、7、8 年になると思う。月に 20 万円くらいうちの持ち出しになる。差額がね。

釜⁴の協友会が寄付金とか募ってるんやけど、その中からぼくらに援助してくれる。それである程度は助かってんねけどね。それでも持ち出しがやっぱりありますわ。持ち出しってね、ようするに、バタヤさんに仕切りわたすでしょ、目方量って。その金払った合計が、要するに赤字になってるわけ。その分、うちが持ち出しって形で。それをある程度協友会から援助してもらってる。

—結果的にはそのお金は野宿者に届いているわけですよね？

谷： この辺の公園なんかに、ビニールのシート張って生活してる、ああいう労働者のなかで、束縛されるのがいやで、収容されるのがいやで、出て行ってる人がおおいわ。自分で自活してるんやからね。ときどき追い立てられることがある。

—そこからどかされるんですか？

谷： うん、それに対しては、やまちゃんていうあの、彼らが応援して、抗議してるのがよくあった。

—そういう野宿者の方たちがエマウス活動やることはできないんですか？

谷： うん、やっぱりちょっと馴染みにくいんやと思うけどね。

—それは彼らにとって束縛になるということでしょうか？

谷： ああいう点、やっぱりヨーロッパ人と、考え方がちやうみたい。でも、うちでも釜⁵からきてる人、何人かおる。もう 50 歳近いひとやけどね、3 人くらいきてます。

—そのようなケースでエマウスに来ることは理想的ではないですか？

谷： 理想かどうかわからんね。うちに規則はない。規則つくったらみんな嫌がるからね。

そやからもう、働く時間と休む時とそれを決めといてね。月に一回収支計算とかをぼくから報告したりして。

自由であるからいてくれると思うわ。ぼくはね、はじめ神戸におるときに、2年4ヶ月ほどバタヤやっとして、やってる内にね、こんなことしとったら一生バタヤやな思て。で、たまたまバラード神父に、箕面に支部があったからね、そこで果樹園と養豚とやっしたから、働かしてくれんかなって。そしたら、さっそく箕面つれてってくれて。

バタヤっていうのはね、王さんと近いような自由があると思うねん。もうほんと、金が無かったら食わへんだけでね、金があったらあそんどったらええしね。でぼくらでも思たんは、もうこんなことしとったら、墮落していくとおもってね。箕面行って養豚の仕事はじめて。でたまたまバラード神父が初めての休暇でフランスへ帰った。ここのオグマル神父っていうのが代役してたんやけど、そのときのここの責任者が辞めさせられて、たまたまここへ呼ばれたんです。

もうそれから40年。

でちょうど、35歳の時にきたからね。暁光会ではぼくがいちばん古い。創立は昭和31年。

ーフランスで発足してから、すぐに日本にもできていますね。

谷： そのじぶんね、バラード神父がね、まだ町に貧しい人があふれてるでしょ、とにかくそういう活動したいと思ってね、東京に蟻の街のマリアっていわれている北原さんを頼っていった。ぼくがきた時はもう彼女は亡くなってたけどね。

彼女の活動は2、3年かな。北原さんはエマウスが出来るまえから活動されてた。

神戸かえってバタヤやってくれというんで、その代わり、よく事情を知っている人をつけてあげるからっていうんで、それでこっちかえってきたわけ。バラードさん外人やし一人ではできないからね。だからその人がほとんどお膳立てして、はじめたわけ。エマウス運動の始まり。

はじめはみんなやっぱり入ってきてくれなかったらしい。で、なんかのきっかけでね、ひとり入ってきたひとが、あそこは楽で飯も食わせてくれて、ええで、っていうんで、それで人が入ってきた。ぼくが来たときはもう20人くらいおったな。

ー20人くらいで、もうやっしていけるんですね？

谷： 20何人いうてもね、自分で車引っ張っているひとは自分の稼ぎ。で会員の仕事しているひとはトラックで回収にでるわけ。その人たちは、要するに小遣いというかたちでエマウスからもらっていたわけ。

ーエマウス自体には何も入らないんですか？

谷： エマウスには、トラックで回収に行くでしょ、それがエマウスの金になるんよ。で、その中から、働いた人に小遣いを、一週間になんぼかね。

ー週何日くらい回収に出るんですか？

谷： 毎日。会員はね。ふたつに分かれてた。会員として働く人と、ここに住まいをさし

てもらって自分たちで集めてきて、会に買ってもらう。で自分たちで生活すると。そういう形をとった。

ぼくがここにきた時も、自分の車引っ張ってバタヤしてるひとが5、6人おったかね。であとは会員の仕事やね。会員の仕事いうてもあの、住友ビルで出る紙を昭和37年くらいからずっと暁光会がやっている。その、紙の整理があるでしょ、事務所でゴミ箱の中にほうりこむでしょ、それを作業員が整理して、もってかえてきて。

ーそれをまたリサイクルするわけですか？

谷： ぼくをかわいがってくれたビル管理の上の方のひとが、おまえそんなんでもうからんから請求せいやいうて、それで金もらえるようになった。

ーどこに請求するんですか？

谷： 住友ビル管理株式会社。そこからもらえるようになって、年々あげてくれって頼んで、今は月45万もらう。だから、うちの大黒柱やねん、住友無しではやっていけんね。年間700万くらいになるから。仕事にうちから2人で行ってるからね。車で行って。大体半日かかるね。

ーそれを毎日ですか？

谷： 毎日。むこうが休みに日以外はね。はじめは休みがなかったけどね、今はもうコンピュータをつかうようになってから、だんだん紙がへってきて、フロッピーで残しよるから。何割かもう捨てないといけない紙。一時削ろうかという話がでたらしいけど…。年末は応援に行ったりしてるけどね。

ー谷さんも回収などに一緒に行かれるのですか？

谷： ぼくのやれる範囲のこと。みんなで二階で選別したりね。

ー現在のメンバーの数は何人ですか？

谷： 15人。ぼく含めて。

ー年齢構成はどのようになっていますか？

谷： 20いくつかな、23から30代2人、40代3人、50、60、70、80がぼく。バランスはとれてる。

ー若い人たちもいますね。

谷： リストラで首になったひととかね。

ー社会に絶望してしまったということですか？

谷： ほとんどね。すきでやっているというのはない。食わんがためにやってる。

ぼくが来た翌年に、バタヤを無くそうと思うんで、みんなと一緒に働かんかいうて。期限を半年くらいつけてね。バタヤをやりたい人は、ここを出てやってほしいと。ほたらね、ひとり中で働いていうもんがでて。あと、出て行った人もおるけどね。最後まで残ったもんは1年くらいして出て行った。ほとんどバタヤさんをぼくらのなかで収容して、一緒にやるようになって。一本化したほうがええでしょ。バタヤさんを抱えているよりは。会の仕事を一本化するわけ。バタヤを廃止するわけ。

ーもう単独のバタヤさんはいないんですか？

谷： 2年かかったけど、全部せいでできた。残った人はみな会員。

—毎日働いているんですか？

谷： 体の調子が悪くない限りだいたいね。みな。

—ピエール神父には会われましたか？

谷： 会ったよ。ここにも来たし。昔ね、チリで紛争があったんよ。そのときにアベ・ピエールはね、要するに労働者側にたつとって、危ない目にあっただらしいわ。そのあと、チリからここによってかえったとおもう。

あの人は、エマウスの象徴的なひとやからね。ほとんど自分で、みなと一緒にはたらくということはしていない。もう年も年やし。パリに案内所ができてるんやろ、エマウスの案内所。

—今日はどうもありがとうございました。(握手を求める)

谷： ぼくね、右手が悪いの。今なんとか左でできるけどね。

注：

1. 廃品回収を主な収入源にしなが、路上生活あるいは社会住宅などで生活している人々の俗称。屑屋ともいう。
2. 大阪、釜ヶ崎。あいりん地区とも呼ばれる。伝統的に日雇労働者の町。
3. 集めた古紙などを持っていった際にもらえる金銭のこと。
4. 釜ヶ崎キリスト教協友会。釜ヶ崎で支援活動をおこなっているキリスト教系団体が組織している。